

氏名	能 勢 聡一郎		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	博 甲 第 706 号		
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 63 年 3 月 31 日		
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科病理系病理学(二)専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)		
学 位 論 文 題 目	ヒト胎生期リンパ網内系における S-100 蛋白サブユニット陽性 組織球およびリンパ球の発生に関する研究		
論 文 審 査 委 員	教授 栗井通泰	教授 木村郁郎	教授 小田琢三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

ヒトリンパ網内系において、S-100 蛋白 α 鎖および β 鎖が免疫組織学的に、それぞれ単球-マクロファージやいわゆる T 領域組織球に見いだされることが判明している。さらに S-100 β は T リンパ球の一部にも陽性となる。著者らは胎生第 4 週から第 21 週の胎児、卵黄嚢につき、S-100 蛋白サブユニット特異抗体を用いて、S-100 陽性の組織球やリンパ球の個体発生について観察した。S-100 α^+ マクロファージは骨髓造血のみられない胎生第 4 週の卵黄嚢や胎児肝類洞内にすでに認められ、胎令が進むにつれて全身に分布してゆき、胎生期後半には成人と同様の分布を示した。S-100 β^+ 組織球は、胎生第 5 週の肝類洞内に最初に認められ、S-100 β^+ リンパ球は最初に胎生第 12 週の胸腺で認められた。いずれも胎令と共にその数を増し、他の臓器へと分布していった。これらの結果から、S-100 α^+ 組織球、S-100 β^+ 組織球、S-100 β^+ リンパ球の三者は個体発生の上で異なる細胞系に属していることが示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は胎生 4 週から 21 週の胎児、卵黄嚢につき S-100 蛋白サブユニット特異抗体を用いて S-100 陽性の組織球やリンパ球の個体発生について観察したもので、得られた結果は S-100 α^+ 組織球、S-100 β^+ 組織球、S-100 β^+ リンパ球の三者が個体発

生上で異なる細胞系に属していることを示唆している。これらの知見は重要で価値ある業績であると認める。

よって本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。